

第7回学習院大学身体表象文化学会大会 研究発表要旨集

日時：2023年11月25日

於：学習院大学西5号館302教室、及びZoom配信

《プログラム》

第一部：研究発表（発表：25分 質疑応答：10分）

・研究発表1（13:05-13:40）

「実相寺アングル再考——実相寺昭雄初期テレビドラマ作品『おかあさん』の考察」

居林祐一郎（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士前期課程）

・研究発表2（13:40-14:15）

「ジャン＝ピエール・メルヴィル研究

——アラン・ドロン3部作における「プロセス」の過剰とプロフェッショナリズムの賛美」

岡部駿（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士前期課程）

・研究発表3（14:15-14:50）

「現代中国における「二次元」コミュニティの変容をめぐって」

李思擎（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程）

第二部：基調講演・トークセッション（15:00-17:00）

・基調講演

「宮崎駿の神と革命——『君たちはどう生きるか』から『風の谷のナウシカ』へ」

講演者：杉田俊介（批評家）

・トークセッション

登壇者：杉田俊介、佐々木果（学習院大学教授）

司会：砂澤雄一（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程修了）

発表1：実相寺アングル再考——実相寺昭雄初期テレビドラマ作品『おかあさん』の考察

発表：居林祐一郎（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士前期課程）

司会：氏原健太（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程）

【発表要旨】

本発表では、幅広いジャンルで活躍した映像作家、実相寺昭雄（1937-2006）を取り上げる。彼はとりわけ特撮作家として知られているが、本発表の目的は、そうした実相寺像からの乖離を図り、新たな作家像を構築することにある。そのために、今回着目するのは、実相寺が初めてドラマ演出を務めた『おかあさん』である。本作はTBSで1962年に放送された30分の連続テレビドラマであり、これには大島渚や石堂淑朗といった、後に実相寺と深いかわりを持つ人物たちが脚本家として名を連ねている。

作品の考察にあたって、その手がかりとするのは、実相寺の代表的な技法である「実相寺アングル」である。実相寺アングルとは、被写体の前方に遮蔽物を配置する極端ななめの構図のことである。その独特なカメラワークは、先述した特撮作家としての実相寺とこれまで深く結びついたものであった。

本発表は、彼の手がけた最初期のテレビドラマの中に実相寺アングルを「発見」することで、特撮作家という理解に必ずしも帰結しない作家像を構築しようとするものである。それは作家の新たな「実相」に迫ることに他ならないであろう。

発表2：ジャン＝ピエール・メルヴィル研究

——アラン・ドロンの3部作における「プロセス」の過剰とプロフェッショナリズムの賛美

発表：岡部 駿（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士前期課程）

司会：中田真梨子（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程）

【発表要旨】

本発表は、映画監督ジャン＝ピエール・メルヴィル（1917-1973）によって制作された『サムライ』（'67）、『仁義』（'70）、『リスボン特急』（'72）の所謂アラン・ドロンの3部作を対象とし、従来「ヌーヴェル・ヴァーグの先駆け」あるいは「（フランス製）フィルム・ノワールの完成者」という言葉で語られてきた彼の作品に内在的な性質を明らかにする。というのも、こうした説明は、メルヴィルがヌーヴェル・ヴァーグの面々と反目したことや、彼の商業的ギャング映画へ批判が寄せられたことを無視してしまうからだ。メルヴィル解釈をめぐるこの矛盾が、彼の作品に対する研究を長く遠ざけてきたと言える。

本発表では、商業主義化したメルヴィル作品にこそ独自性が見出せるとの立場をとり、これを顕著に示す例として、既に人気俳優であったドロンのスター・イメージを一変させるほど独創性に溢れた上記3部作を中心に取り上げる。このとき着目すべきは、この3部作が、1) 30年代の米国製ギャング映画の影響下にあること、2) そうした影響を受けながら、古典的ハリウッド映画の文法からは逸脱した「プロセスの映画」（コリン・マッカーサー）としてあること、である。とりわけ後者は、説話論的有用性に回収されざる過剰なアクションに結実し、それがまた、登場人物のプロフェッショナリズムを賛美して、ナルシズムやホモフィリアを醸成するのだ。

このようにして見出されたメルヴィル映画の特質が、彼のフィルモグラフィー全体へ開かれた作家論を成立させること、これを今後の見通しとして示し、発表のまとめとする。

発表3：現代中国における「二次元」コミュニティの変容をめぐって

発表：李 思 擎（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程）

司会：高橋由季子（学習院大学助教）

【発表要旨】

中国大陸（以下、中国）において、マンガ、アニメ、ゲーム、ネット小説などの二次元コンテンツを愛好するファンコミュニティが「二次元」と呼ばれている。また近年「飯圈」という芸能人を対象とする過激な応援行動を行うファンコミュニティが注目されるようになり、同じサブカルチャーのくくりとされる「二次元」コンテンツのファンコミュニティにおいても「飯圈」の影響を受けて似たような行動が増えている。現代中国における「二次元」コミュニティが「飯圈」化する現象の考察はコミュニティの解像度につながる。

近年「飯圈」の思考と行動が芸能人以外のジャンルでも頻繁に見られているため、現代中国のファン文化を語るにはその分析が不可欠である。本発表では、二次元コンテンツにおけるファン活動の諸事例を挙げながら、虚構作品をリアルの存在として扱う流行や、ファンによる自己主張の顕在化などの現象に言及し、「二次元」が中国におけるサブカルチャーの重要な構成要素として認識されていることから、「二次元」と大衆文化の関係性を考察する。

基調講演・トークセッション

宮崎駿の神と革命

——『君たちはどう生きるか』から『風の谷のナウシカ』へ
杉田俊介

【講演要旨】

かつて政治思想史家の橋川文三は、二・二六事件に象徴される日本近代史の謎を解き明かすには、日本の民俗的な魂に根差したドストエフスキーのような天才が必要だ、と書いたことがあるが（国家の魂しか持たない三島由紀夫や北一輝では足りない、と）、そうした天才の仕事として、漫画版『風の谷のナウシカ』のことを思ってきた。科学と生命、政治と宗教、自然とユートピアをめぐる作中の様々な対話は、日本／アジアの民俗的な魂に根差した『カラムーゾフの兄弟』を思わせる。宮崎駿の最新作『君たちはどう生きるか』は、母親の死と甦りを一つの主題としていたが、宮崎は一九八四年の中国旅行で、死んだ母親が中国人女性の赤ん坊として輪廻転生しているのに出会った、という「或る童話的経験」（小林秀雄）を語ったこともある。であるなら、問いはアジア／東洋的なものに関わるのだろう。宮崎駿作品を通して、来たるべき政治神学的なものの可能性を（批判的に）考えてみたい。

杉田俊介（すぎた・しゅんすけ）

1975年生まれ。批評家。雑誌『対抗言論』編集委員。著書に『宮崎駿論』（NHK ブックス）、『ジャパニメーションの成熟と喪失』（大月書店）、『橋川文三とその浪漫』（河出書房新社）、『神と革命の文芸批評』（法政大学出版局）、『男が男を解放するために』（P ヴァイン）など。

・トークセッション

登壇者：杉田俊介、佐々木果（学習院大学教授）

司会：砂澤雄一（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程修了）